

# 砕石プロフィール '85

静岡県砕石業協会

## 8. 勝間田社長を囲んで

出席者（敬称略）

勝間田良太郎

後藤良夫

岩崎鐘平

中瀬光夫

司会

小澤進

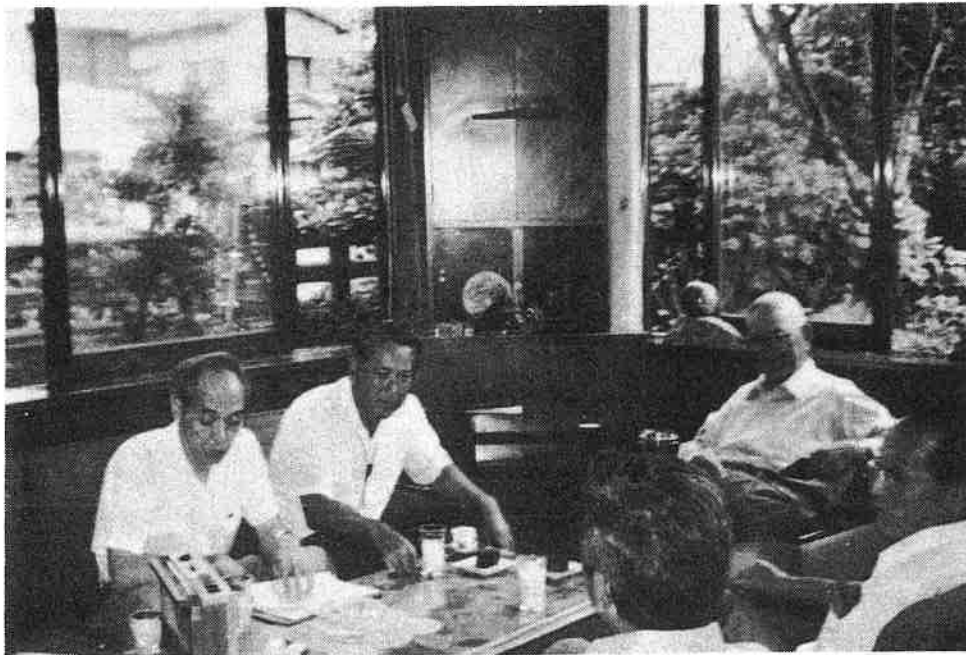
二葉建設(株) 社長

後藤碎石販売(株) 社長

(株)川村組専務取締役

三嶽鉦山(有) 所長

静岡県碎石業協会専務理事



### はじめに

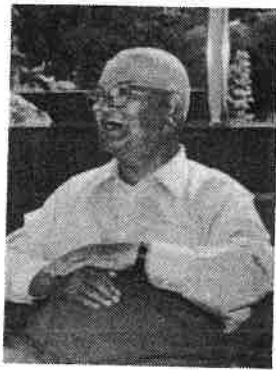
昭和60年8月6日(火)御殿場市にある二葉建設(株)事務所において、勝間田社長を囲んで、碎石にまつわる有意義なお話しを聞くことができました。

勝間田社長は、当年85才になられますが、血色がよく文字通りかくしゃくたるもので、こと商売のお話しになると迎も雄弁になられ、止まるところを知らずと云ったところで、今も仕事の虫と云われる氏の面目躍如たるものがありました。



小澤 本席は、さきの総会で決まった碎石20周年誌を作る  
ことについて、後藤会長をはじめ岩崎、中瀬両副会長ととも  
ども勝間田初代会長を囲んで、昔の思い出話や珍しい経験  
談等の御高説を賜り、その記事を碎石20周年誌に掲載して、  
今後の碎石の進路を模索したいと考えていますので、よろし  
くお願いします。

では、最初に勝間田社長から社長が碎石をはじめた頃の世相等からお話し願  
います。



勝間田 商売をはじめたのは、私が22才頃だと思うから、も  
うかれこれ60余年になります。あの、大正12年9月に起った関  
東大震災で、不景気風が吹き荒れる最中であって、河川敷に  
使う芝を東京へ出荷することをやり、これがうまく当り、若  
さと運に恵まれて、この時ある程度の基金を得ることができ  
ました。やがて、日中戦争がはじまり、軍の動きが活発とな  
り、その一環として昭和15、6年頃に至り、学徒動員による宿舎（1,000人収容）  
を私が考えたり、飛行場や馬の飼料に必要な芝や乾草にも手を出して、商は順調  
に伸びました。それから今の東山工場で、はじめて碎石をやった。それが昭和30  
年頃でした。御殿場地区は、砂利のない特殊な地区でしたから、そして昭和36、7  
年になって東海道新幹線工事に碎石が使用され、いよいよ碎石の黄金時代を迎え  
たのであります。とにかく終戦直後は、進駐軍の強大な権力の陰にあって、その  
権力を積極的に利用し常に時代の波に乗った商法が図に当たったのです。この60  
余年の間一貫して今も変わらぬことは、ひっ掛けられても、ひっ掛けるなど云う  
ことです。悪銭身に付かずと申しますが、これは私の信条であります。

小澤 お話しのように勝間田社長の波乱に富んだお話は、仲々尽きませんが、  
社長の先見の明には全く頭が下がります。今度は、後藤会長が碎石をはじめた動機  
をお話し下さい。

後藤 アスファルト舗装に碎石が使われ出した。つまり道路に碎石が使われ出  
したのは、昭和30年頃でした。それはどう云うことかと申しますと最初国道1号  
は、コンクリート舗装でしたが、これがアスファルトに切り替ったのです。



丁度静岡に国体があって、草薙グラウンドの周辺整備をやった。これが静岡のアスファルト舗装のはじめであったのです。その時は、既に二葉さんは碎石をやっていたのですから驚きです。御殿場は、砂利のない特殊な地区だったからでしょうか。私の方は、これを見ていたのです。見ていたと云うのは、今の前田道路の前身である高野建設が稲子で碎石をやっているのを草薙へ全部運んで東海道を逐次舗装し出したのです。ところが、その高野建設が突然倒産して了った。すると途端に富士、富士宮地区は石がなくて、神奈川県根府川から石が入ってきました。それで二葉さんが運搬距離を考えて東山から富士宮まで石を運んだのです。その時、私の山には石が沢山あると云うので、それでは、私も碎石を始めてみようかと云うことで、見よう見真似で、目くら蛇におじずで、やり出したのがはじまりです。

小澤 その時代の碎石の機械は何かチャチなものだったと聞いていますが。

後藤 そうです※10×7ではじめたのです。実はその時、勝間田社長が見えたのですが、その時は※10×7ではなくて※16×10という機械でした。それで、社長が貸してくれた機械と云うのは、郷鉄工の※20×10とか云う機械でしたが、これは性能のよいもので、今までの約倍の生産が上った。社長は、私のチャチな機械を見るに見かねて貸してくれたのですが、本当に有難く思った。今も忘れません。当時のことですから仕事は、スコップ片手の手仕事が多かったのです。想えば、遠く今から30年も前のことです。

勝間田 後藤さんの今日あるのは、後藤さんのお父さんの持っていた山が良かったからだ。何しろ高さ300メートルの山だが、これが全部石である。土曜日にブルで一日突からかせば、後はその石をこなせば一週間分はあると云うのだから驚きです。

小澤 次に川村さんのところは、どういうきっかけで、碎石を始めたのでしょうか。

岩崎 私のところは、元々砂利屋であって、安倍川で古くから砂利を振っていました。碎石をやり出したのは、新らしく昭和40年代に入ってからです。玉砕と山砕の両方をやりました。碎石の前身は砂利だと思います。砂利は、どこから採



れるかと云うと河川です。もっとも現在では、山から陸から又海からもとれますが、一方コンクリート作りには川も山も関係はありませんネ。まず砂利を使いますが、昭和40年代には安倍川にも砂利がポツポツと枯渇しはじめた頃でした。そこで、砂利に山砕を混ぜたらどうだろうと考えたのが私のところが山砕、玉砕の両方をやりはじめたキッカケです。

小澤 中瀬さんのところは、何がキッカケでしたか。



中瀬 私のところは、うちの親父がこれが社長ですが、戦前から船をやっていました。で、戦争中にその船を徴用されたり又渥美半島に弾薬を積んだりしていましたが、直接碎石をやると云うキッカケは、矢張り船で浜名湖へ入ってきた碎石を見た時です。その当時三嶽の山は、石灰石のいゝ山でしたが、その石そのものよりも私どもは切った木を薪にする仕事

でしたから、その時は山の木を切るために三嶽の石灰石の山を買ったのです。これが又すばらしい山でして、表土はないし早速碎石ではなくて、石屋をはじめたのです。最初は、石を発破にかけて切って、ほとんど積石をやっていました。これが昭和27年でした。昭和30年頃からは碎石に移行したのですが、浜松地区では、私のところが一軒だけだから全く独占です。然し当時は、碎石も規格が不完全なら県の検査も不十分でした。作れば皆うれる良き時代でした。今館山寺あたりの石灰石は、ほとんどうちが三嶽の山から船で運んだものです。

小澤 それでは、時間も大分たちましたので、最後に碎石業者がこれから生き残って行く為には、どう云う心がまえと云うか、その辺のノウハウを話してもらえませんか。勝間田社長どうでしょうか。

勝間田 ○まず、第一にいゝ山を沢山持っていることだ。

○それから、近くに山があること。(遠いと碎石代が運搬費に喰われてしまう)

○自社に近いところで、仕事ができること。

以上の三つに尽きると思うが、それには日頃心掛けをよくすることが大切である。

中瀬 山がいゝことは、確かに大原則です。残壁の処理が残るところは感心し

ない。

後 藤 勝間田社長の持ち山は、皆場所がよい。つまり地価の高いところで、跡地に価値が出てくることがよい。砕石業をやっているとしても最後は土地だ、その点社長のやり方、考え方には全く感心します。

勝間田 私の企業に対する姿勢は、みたこと勝負であること。つまり山にしても見たまゝの評価をすることで、決して見えないものには、評価をしないこと。（山の中味までは判らない）これは、トンネルを掘る時に等しいと思っています。又砕石は魚や野菜類と違って、腐らないので積んで置けばよい。急ぐことはないのです。その点は強味です。もう一つ砕石の強味は、砂利は御承知の通り色々の石が混った製品だが、砕石は一種類であるから、石がいゝ場合はすばらしい品質が得られることだ。

小 澤 私から一言申し上げますが、私は昭和48年よりこの協会に籍を置いています。この協会は歴代の会長をはじめ役員、委員の方々が今まで非常に努力されて、会員が一致団結して問題解決に当って来ています。例えば対行政関係では初代の勝間田会長の時には、認可期間の一年を二年に延長を認めていたとき、次の青木会長の時には、更に二年を三年、又現後藤会長は、コンクリート用砕石混入を全県下的に認めていただいた。これ等のことは、勿論各会長の人柄によるものと思いますが、会員各位の堅い団結の賜と深く敬意を表する次第であります。

では、こゝらで、未だお話し願いたいことは沢山ありますが、それは次の機会に譲ることとして、本日はこれを以って「勝間田社長を囲んで」を終りたいと思います。どうも永い間貴重なよいお話しを有難うございました。

---

注※ 10×7とは、岩石投入口の寸法を表したもので、S-1と呼ばれ製作会社は、(株)郷鉄工所です。性能は、5.5t/hの破碎機であります。現在は、クラッシャーの種類にもよりますが150t/hは普通で、種類によっては、300t/h以上のものもありますから隔世の感が致します。

記

投入口 10吋× 7吋 (S-1)	5.5t/h (標準運転の時)	郷鉄工所製
投入口 16 × 10 (S-2)	11.5t/h ( " )	"
投入口 20 × 10 (S-3)	17.0t/h ( " )	"